

[印象記]

## 特別講演の印象記

第19回新潟医療福祉学会学術集会 大会長  
特別講演 座長  
東江由起夫



この度の学術集会は、2020年東京オリンピック・パラリンピックを控え、その後のレガシーとして新潟医療福祉大学の強みである保健・医療・福祉・スポーツ分野における人材育成をどのように活かしていくか、「アスリートを支援する先進的保健・医療・福祉・スポーツネットワーク」をメインテーマにしました。

そして特別講演には日本障がい者スポーツ協会参事 中森邦男先生をお迎えし、そのレガシーのヒントにするために「2020東京パラリンピックが目指す無限の可能性」をテーマにご講演をいただきました。

中森先生は1971年、天理大学体育学部体育学科を卒業した後、大阪市身体障害者スポーツセンターに勤務され、その後1986年（財）日本身体障害者スポーツ協会東京都障害者総合スポーツセンター、2004年日本パラリンピック委員会事務局局長兼任、2011年（財）日本障害者スポーツ協会指導部長企画情報部長兼任、2013年（公財）日本障がい者スポーツ協会強化部長を経て、2018年、現在の日本パラリンピック委員会参事に着任されました。その間、障がい者スポーツの普及ならびにパラアスリートの指導育成、2020パラリンピックに向けた組織づくりに携わり、障がい者スポーツに精通した方です。

講演では、まず、パラリンピックを理解するためにその発祥の地、創始者、目的、障がいの種類、競技の種類、障がい別持ち点等について説明がありました。パラリンピックはイギリスのストーク・マンデビル病院のロードイッチ・グットマン博士が、第2次世界大戦で脊髄損傷者となった兵士への機能回復訓練にスポーツを取り入れた院内スポーツフェスティバルに発祥しています。1960年の第1回大会はローマオリンピック後に開催され、以降、オリンピック開催国で開かれるようになり、当初は車いす使用者が対象とされていましたが、回を重ねていくうちに手足の切断や機能障がい、視覚障がい、知的障がいの人が参加し、競技数も増え今日に至っています。そして2008年の北京大会から国際オリンピック委員会と

国際パラリンピック委員会が協力し、現在のオリンピック・パラリンピックへと発展してきました。東京2020パラリンピック開催決定後は強化費の増額、専任スタッフの設置、日本財団パラリンピックサポートセンターによる支援、企業によるパラアスリートの雇用、TVコマーシャルの採用、スポンサー契約、奨学金制度導入など、健常者アスリート同様の支援が受けられるようになり、その結果、競技力は向上しオリンピックに見劣らない素晴らしいパフォーマンスを見せるようになったとの講演がありました。

中森先生からは、すでに構築された本学の保健・医療・福祉・スポーツ分野の学科間連携を活かし、教員ならびに学生が協働して健常者アスリートのみならずパラアスリートの育成は、他の大学にはない先進的な取り組みになると強く期待をよせていただきました。

